

# 友の会通信

132  
2026.06

Vol.30 No.1 通巻132号 2026年6月15日発行(年4回発行)



## 2026 年度友の会事業について

2026年4月26日に友の会総会を開催し、2025年度の事業報告及び決算報告、2026年度の事業計画案及び予算案についてご承認いただきました。講座については今まで実施してきた講座に加え、博物館の企画展に合わせ、シンポジウムの開催も予定しています。

友の会の皆さまには、ぜひ興味のある講座への参加をお願いします。また、繰返しになりますが友の会は会員の皆様の「知りたい」「やってみたい」という想いが主役です。

企画のアイデアや運営のお手伝いなど、様々な形で活動に関わっていただき、友の会を通して自然を楽しんでいただきたいと思います。

## 目次

|        |    |
|--------|----|
| ご挨拶    | 2  |
| 事務部より  | 3  |
| 活動報告   | 4  |
| 情報クリップ | 13 |
| 行事案内   | 13 |

## 今年度もよろしくお願いします

会長 鈴木智明

今年もまた新たな年度が始まりました。よろしくお願いします。また日頃より友の会活動に対しまして、深いご理解と温かいご支援を賜り、重ねて御礼申し上げます。



先日行われた友の会総会も第30回ということで、20周年記念誌を出してからあっという間に10年近く時が経過したのかと驚いています。30周年のイベントはこれから検討して行きますが、今までの振り返りというよりは、今後どうしていくかを検討する一環として、何かできればと思っています。友の会が発足した30年前とは世の中の環境や皆さんの意識もだいぶ変わっています。ただ、手段や方法等は変われど、生命の星・地球博物館を応援し、自然科学の魅力を共有するという友の会の目的は変わらないと思っています。

しかしながら、現在の友の会は「講座のマンネリ化」「会員数の減少」「運営体制の硬直化（特に会計・監査・広報の人員不足）」という、一筋縄ではいかない大きな課題に直面しております。これらは当会だけに限ったことではなく、昨年、大阪自然史博物館で開催された友の会サミットでも主要テーマとして状況が共有された、多くの博物館に共通する悩みでもあります。

こうした課題について会員の皆様と現状認識を共有し、何ができるか、検討していきたいと考えています。幸いにも、今年の秋にはここ生命の星・地球博物館において、関東初となる「友の会サミット2026」の開催が予定されています。各地の知見を結集し、館を超えた新たなネットワークを発展させる好機を活かし、他の博物館の事例も参考にしながら、友の会の確かな発展へと繋げてたいと考えます。

どうすれば、講座がより魅力的になるか、新しい会員を惹きつけられるか、より多くの方が無理なく運営に関われるか、いろいろな課題に真摯に向き合い、皆様と共に解決策を探っていききたいと思っています。皆様からの忌憚のないご意見や、新しいアイデアをぜひお聞かせいただきたいと願っております。会員の皆様のご協力をぜひお願いします。

## 新米館長ですがよろしくお願いします

館長 佐藤武宏

友の会会員のみなさま、こんにちは。令和8（2026）年4月1日づけで、生命の星・地球博物館の第6代目館長になりました、佐藤武宏（さとう・たけひろ）と申します。よく来館される会員の方とは直接お話ができるのですが、友の会通信を経由して繋がっている会員の方には直接お話しする機会が少ないので、簡単な自己紹介から始めさせてください。



わたしは平成7（1995）年4月、生命の星・地球博物館が開館した12日後に無脊椎動物（主に貝類・甲殻類）担当の学芸員として採用されました。当館では人事異動で学芸部と企画情報部を行き来するのですが、わたしは企画普及課の在籍歴が長い学芸員です。田中徳久前館長も企画普及課在籍歴が長かったのですが、友の会、ボランティア、博物館協会といった外向けの華々しい仕事で実力を発揮された田中前館長とは違い、わたしは広報誌の編集、部屋の管理、地方独立行政法人化の検討、博物館自己評価、第三者評価といった地味な仕事が多く、友の会との接点もあり多くはありませんでした。企画普及課長になってからは役員会などで友の会との接点も増えましたが、コロナ禍の襲来でそれもオンライン経由になってしまいました。

今回、久しぶりに友の会役員の方と対面でお話しし、友の会が間もなく30周年を迎えること、会員数が微減していること、役員のなり手が減っていること、若い会員がなかなか増えないことなど、よいお話と苦しいお話を伺いました。

考えてみると、30年というのは、ある人が生まれ親の腕に抱かれてから、自分が親になって我が子を腕に抱くまでの時間に概ね相当します。親に連れられて博物館にやって来た人が、我が子を連れて博物館にやって来るように、親に連れられて友の会活動に参加した人が、我が子を連れて友の会活動に参加するような、そんな世代の繋がりが感じられるような友の会になればいいなと思っています。30周年という節目に向けて、友の会活動がより一層活発になるようにお手伝いできればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 事務局より

### 2026 年度第 30 回友の会総会の開催

2026年4月26日（日）13時30分より、博物館星槎ミュージアムシアターにて第30回友の会総会が開催されました。

会長挨拶では、昨年度の活動への感謝と共に、昨年度来の友の会の課題である「講座のマンネリ化」「会員数の減少」「運営体制の硬直化」について、他の博物館でも同様の課題があり、2025年11月に大阪自然史博物館で開催された友の会サミットでも主テーマとして状況共有された旨、報告がありました。一筋縄ではいかない課題ではありますが、今年度も他の博物館の事例などを参考に検討して行く予定です。ちなみに、今年の秋には生命の星・地球博物館で、「友の会サミット2026」が開催予定となっています。元々大阪自然史博物館が中心となり、館の垣根を超えた情報交換や交流を行う「友の会サミット」が2005年から10年ごとに行われてきましたが、今回、この潮流をさらに加速させるべく、関東で初となるサミットを開催し、これまでの各地の知見を共有するだけでなく、個別の館を超えて活動する支援団体も交え、新たなネットワークの形成と発展を目指すものです。他の博物館の事例や検討内容等を参考に、当友の会の発展に繋がればと考えています。

議事審議では、2025年度の事業報告（博物館との共催事業、事務局・広報活動、講座実施状況）と決算報告が行われ、いずれも質疑応答の後、拍手多数で承認されました。

次に2026年度の新役員体制案が提示され、新任・退任役員の紹介の後、拍手多数で承認されました。昨年同様、役員の高齢化や人員不足（特に会計、監査、広報）が課題として挙がり、協力者が募集されました。

また、2026年度の事業計画案（共催事業継続、友の会のあり方検討、情報発信継続、新規講座企画）と予算案が提案され質疑応答の後、いずれも拍手多数で承認されました。

今年度も多くの講座を企画しています。ぜひご参加くださるようお願いします。

### 2026 年度第1回友の会役員会の開催

2026年4月18日（土）、友の会役員会がZoomにて開催されました（発送作業が無いときはオンラインで実施しています）。主な議題は、4月26日の総会の最終確認です。

内容としては総会で皆さんに諮る議案書の内容や、役割分担の確認を行いました。

今回の総会イベントは、館内での講演会なので懇親会への流れや駐車場の注意事項等、整理・アナウンス方法等を確認しました。

また、今年度新たな講座として7月予定の里山関係のシンポジウムの内容や、9月予定の友の会サミット2026について、内容確認や博物館との調整事項等の整理などが検討されました。

### 2026 年度第 2 回友の会役員会の開催

2026年5月10日（日）、友の会役員会がZoomで開催されました。

まず、会員数が現在281名（目標363名）であること、および発送費などの現時点の会計状況が報告されました。

主要な議題は、先日行われた総会・イベントの振り返りです。講演会（参加80名）では、終了後の参加者の退出が予定より少し遅くなってしまったので、次回は明確にアナウンスを行うことなど駐車場利用や参加者誘導における課題が指摘されました。

今後の日程については、2026年度の役員会日程を確認。

その他、友の会創立30周年企画について、次回の役員会で内容を検討すること、7月予定の里山関係のシンポジウム及び9月予定の友の会サミットについて、内容の共有等を行いました。また博物館からは燻蒸期間の休館や特別展の日程について連絡がありました。

次回は7月4日（土）です。発送作業もあり、博物館での開催となります。



## 活動報告（地学グループ）

### ◆地話懇話会

『街角地質学～日本の近代化を支えた石材』  
2026年1月24日（土）14：30～16：00／博物館講義室／90人（講師・スタッフ11人含む）／講師：西本昌司氏（愛知大学）

三度の飯より石が好きな西本昌司先生のお話をお聞きしました。会場一杯の参加者の中にお子様たちもいて、会場は常に笑い声が絶えず、あたかも寄席に来ているようでした。笑いながら、しかも、石についての豊富な知識を学ぶことができるという。石丁場の内容なだけに、一石二丁といった贅沢な90分間でした。

「石材は人の営み、岩石は地球の営み」岩石から地球の歴史を読み解き、石材から街の歴史を読み解くというお考えのもと、先生独自の造語「示準石材」を私は気に入ってしまいました。

東京駅界隈の建物の壁には、諸外国の大理石や日本国内の多くの花崗岩が使われています。代表的なものに、岡山県北木石と万成石、茨城県稲田石と真壁石、山口県徳山石、広島県議院石、神奈川県の小松石（安山岩）と白丁場石などがあります。

当博物館の外壁にインド産とスペイン産の花崗岩、内壁や床にポルトガル産霞石閃長岩、埼玉県蛇紋岩などが使われていることを知りました。驚いたことに、トイレの洗面所が、ミケランジェロがダビデ像を作ったあの大理石でできていたのです。以前テレビで見たイタリアのビアンコカラーで採掘した大理石なのです。これからは一礼をして手を洗おうと思います。

私は、石販売店に行き墓石を見るのが好きですが、いろいろな石の中で、香川県の庵治石が好きです。庵治石は首相官邸に使われているようです。

石材は割ることなく観察できる。大理石などには貝やアンモナイトなどの化石も入っていて、見るだけで楽しくなります。

建物の中の石材を見て、岩石や産地がわかると楽しいだろうと思います。西本先生は、講演の中で流通と流行がわかると歴史がわかるとおっしゃっています。

ビルや駅の構内の壁の石材を見て、「これは、ボテチーノ、ジュラ紀の石だよ。それは、トラベルチ

ーノ、あれは、ネンブロロザート」．．．  
なんて格好いいのでしょうか。

利き酒と同じ、場数を踏み、慣れるしかないようです。

この「街角地質学」、癖になりそうです。新たな生きがいを与えていただきました。

ありがとうございます。（友の会 湯川清子）



講師の西本昌司氏



講話情景



真剣に聞き入る90人もの参加者

### ◆地話懇話会特別バージョン

『街中石材散歩 in 東京』

2026年1月25日（日）9：30～12：30／東京駅周辺  
／39人（講師・スタッフ9人含む）／講師：西本昌司氏（愛知大学）

私は、数年前に購入した西本先生の著書「東京街角地質学」に触発され、いつか本を片手に、東京の石材を見学してみたいと思っていました。前日の講義には参加できませんでしたが、今回、絶好のチャンスとしての巡検に参加させていただきました（総勢39名という盛況でした）。

第一級の寒波の襲来で、冷たいビル風が吹き抜けるなか、ご案内頂きました西本昌司先生はじめ講師の皆様へ感謝申し上げます。また企画・実施頂きました長山様はじめスタッフの皆様にもお礼申し上げます。

まずは集合場所常盤橋タワー前の公開空地の「佐渡の金鉱石」の説明からスタート。

昨今「金」が異常に高騰しており、この石から取り出せないものか、質問もとんでいたのですが、不可能とのこと（残念？）。

今回の見学場所は11か所ですが、特に印象に残った見学場所について記します（No.は見学順）

## No.2 常盤橋

現存する都内最古の石造りアーチ橋。2011年の東日本大震災で損傷。2021年に修理完了。

親柱などは「水戸寒水」といわれる大理石が使われており修理の跡が良く分かります。近くの常盤橋門の石垣（切込接による布積）には、「本小松」、「小豆島花崗岩」などが使われています。

## No.3 日本銀行本店（外観のみ）

本館の1Fと2Fも外観には、明らかに違いが見られ、1Fは「北木石」、2Fは「白丁場石」。

設計者（辰野金吾）が濃尾地震（1891 M8.0）による名古屋の被害状況を見て、耐震性を考慮し、2Fを軽くするよう「白丁場石」（加工しやすく薄くできる）を貼るよう変更したとのことでした。

## No.5 日本橋三井タワー

外壁のブラジル産の片麻岩「サモア」の赤いザクロ石が印象的です

## No.6 地下鉄三越駅改札付近

柱は「ジュラマール・イエロー」という、ドイツのジュラ系石灰岩。

アンモナイトなどの化石が思いのほか多く見られ、驚きと楽しさを隠せませんでした。

床には、地下鉄側が安価な中国産石材、三井タワー側には「サモア」が使われており、境界が明確に分かります（財力の差が現れているのではとのこと??）

## No.7 ユイト日本橋

ユイトの意味が分からず、後で調べたところ、結都（都・人・時を結ぶアーバンスクエア）とのこと。

この日は、日曜日で銀行が休みのため、ゆっくり見学できました。

壁は「アウリジーナ・フィオリータ」というイタリア産の白亜系石灰岩で、多くの「厚歯二枚貝」の化石が観察でき、研磨面のみでなく、割肌加工も見られます。

（講義で説明があったかも知れませんが、私は厚歯二枚貝がどういった貝か分かりませんでした、田口学芸員のコーヒーマグの紙カップに例えた説明で想像できました）

## No.9 日本橋

江戸時代に五街道の起点とされた日本橋は、1911年に石造りになり、強度、加工のしやすさなどにより4種類の花崗岩「徳山石；硬くて丈夫」「真壁石」「稲田石」「北木石；加工しやすい」

が、部分ごとに使い分けられており、先人の知恵がうかがわれます

## No.10 東京日本橋タワー地下玄関

外壁は下から上まで「コロomboジュバラナ」という、地質学的には Gondwana 大陸形成時に、地下深く、高温高压化の変成帯に見られるインド産のミグマタイトとのこと。部分的に溶け、縞模様がはっきり見える。過去は模様のないものが主流であったが、最近は多く使われている。

バーナー仕上げと本磨きの差が良く分かります。地下の壁面にはノルウエー産の「エメラルドパール」（ほとんど長石、黒く輝いて見えるのは長石の透明度が極めて高いためとのこと?・・・本当に不思議です）。

また、インド産の「チダホワイト」は、ガーネットが輝いている。双方とも、一見して、大理石に見えるが御影石とのこと。また中国産の海南バサルトの割肌加工が見られます。

床には中国産の片麻岩が使われ、白雲母が光っています

## No.11 日本橋高島屋（重要文化財）

本来なら、このような多人数での見学はできないのですが、以前に、高島屋から西本先生へ依頼があり、使用されている石材を調べ上げた、そのご縁で特別に内部の見学が許可されたとのこと先生に感謝です。

1F内装にイタリア産石灰岩「ネプロロザート」が使われ大きなアンモナイトの化石が目立つ。床はトラバーチン。

エレベーター脇の壁は1～2Fがイタリア産の木目調の高級大理石「スタラティーテ」。

3階のエレベーターホール、3～8Fが山口産石灰岩の「黄更紗」、地下には、同じく山口産の「小桜」などと、階によって、使い分けられており、その他、日本橋高島屋にも、日本橋三越と同様に、内外の大理石など高級石材が数多く使用されているとのこと。

## ◎感じたこと

今回は日本橋地区という、東京のほんの一部の見学でしたが、多くの新しい学びがあり、

- ①石材が江戸・東京の発展を支えてきた
- ②使われてきた石材にも時代により流行がある
- ③また私には初めて出会う多くの石材についての説明



など、西本先生のお話が少しはわかったような気がします。

さすがに老舗のデパートなどは違うなと思い、同時に、このような石材の選定は、建設関係者のどの部署の、こういった方が関わっているのだろうかという興味を持ちました。

そして、今回の巡検資料や、西本先生の書籍を持って、復習も兼ねて、再度ゆっくりと東京や横浜の建物などを見学したいと思います。

## ◎追記

西本先生に「私の故郷の中津川市の苗木花崗岩（蛭川御影石・錆石などと言われる）」の、東京の建物での使用例はありませんかとお聞きしたところ、公園などにはよく使われており、記念碑、灯籠、鳥居、墓石、塀材などとしての使用例が多く、建物にはあまり例がないようだとのことで、少し残念でした。（友の会 可知鋭治）

### 【西本講師追記】

建物ではないですが、中津川の蛭川御影石は地球博物館前で使われています。

PRになりますが、中津川市には、鉱物博物館や、国指定史跡の苗木城址などがあります。

特に苗木城跡は、木曽川川面から170mほど高さにある花崗岩の断崖を利用した城跡です。巨大な花崗岩の自然の岩盤の上に柱の穴があり、天守があったと言われています。

眼前には恵那山や中津川市街が、そして眼下には、木曽川を渡るリニア新幹線の橋梁の工事状況などが見られ、風光明媚なところです。岩石好きの皆さんにぜひ訪ねて頂きたいと存じます。



澁澤栄一像前にて記念撮影



西本昌司講師（常盤橋）

田口公則学芸員



日本銀行本店本館を観察



ユイト日本橋



日本橋観察



東京日本橋タワー



## 活動報告（地図を楽しもう）

2026年2月1日（日）／博物館実習実験室・博物館周辺～箱根湯本／5名／講師：新井田秀一学芸員

毎回この講座では講師の新井田さん、「地図は見るものではなく、読むもの」を力説。本講座ではこの「地図を読む」とはどのようなことなのかを体験していただくという講座です。地図を持って野外に出たら①周りをよく観察する、とくに今いる場所に何があるのかまわりをよく見る。②わからなくなったら立ち止まる、③地図とまわりのものをよく見比べて目標物を見つける。これが地図を読むための基本だそうです。

いつものように午前中は講義。テキストは国土地理院地形図2万5千分の1「箱根」です。まずは縮尺、2万5千分の1だから地図上で1cmは実際では250m。指1本はほぼ2cmなので地図上で指1本は500mと実際に想像できる感覚を覚えます。

さらに図法、地図記号、地図上の真偽について学びました。この中で緯度・経度の何分・何秒とはどういうことかの質問があり、60進法であることをわかりやすく説明いただきました。

また実際の景観と地形図を見くらべた場合どのような点に気を付けたらよいのか、どんな目標物が地図を読むうえで活用できるのか。この裏技的なものが「送電線と鉄塔」。地図上で送電線が折れ曲がっているところは必ず鉄塔があるので、これを目印にすると自分の立位置がわかるとの事。これを聞いて参加者の皆さん、強く納得していました。

休憩時には彩色印刷した神奈川県西部の精密地図を見て、参加者の皆さんとわいわいがやがや。すっかり話し込んでしまい、等高線作業の時間が取れなくなることもありました。

午後は地形図を持って外歩きです。山崎発電所と発電所記号、国道1号線上にある1等水準点と記号、ここ海拔50mから一気に等高線5本分50m上って発電所水源地へ、ほぼ100mの等高線に沿って歩き旧湯本中学へ、対岸の三枚橋発電所とここからの送電線が登山電車の架線へつながっていることを確認、国道1号線へ下りて三枚橋へ、三枚橋の変遷をレクチャーいただき早川河原へ、川の堰堤と地図記号を見比べて湯本温泉街へ、河鹿荘

前の小田原馬車鉄道箱根湯本駅跡を見て早川を渡り、吉池前の水力発電発祥の地解説板と石碑を見て熊野神社へ、この神社音読みすると「ゆうや」、ゆうやとは温泉が湧出するところを指し、神社横には箱根湯本温泉の源泉が湧く温泉やぐらがありました。熊野神社、塔ノ沢や大平台、宮ノ下、芦ノ湯等、箱根七湯と呼ばれるところにはあるとの事で、箱根の歴史を感じさせてくれます。最後に国道わきにある旧源泉の横穴を見て湯本駅へ、ここで解散となりました。

参加の皆さん大変満足されたようで、最後に新井田さんの挨拶のあと拍手が送られました。参加された皆さん、新井田さん、ありがとうございました。（友の会 関口）



午前中は地図の基礎をわかりやすく学ぶ



実際と地図を見くらべて観察する参加者



熊野神社前の箱根湯本源泉碑横で地図を読む



## 活動報告（よろずスタジオ）

### ◆「溶岩の噴火実験」

2026年3月22日（日）／博物館講義室／72名  
（大人38名、子ども34名）／協力：西澤文勝学  
芸員／スタッフ：3名

今回のテーマは「溶岩の噴火実験」です。入口の案内板を見て入ってこられた参加者は先生から噴火実験のお話を聞き興味津々。実験には用具と材料が重要とのお話で、まずは用具の確認。テーブルの上のバットの中のプラスチックのカップとその蓋、木べらです。カップの蓋に穴が開いていることも確認。真ん中のテーブルの上に置いてあるお酢と洗濯のりと重曹、この3つが溶岩になる材料です。

いよいよ噴火実験の開始。実験の手順と注意点のお話の後、材料を順番にカップの中に入れていきます。最初にお酢をカップの赤い線まで慎重に入れ、次に洗濯のりを青い線まで入れ、そして木べらでよくかき混ぜます。最後入れるのは重曹です。袋の中からスプーン1杯の重曹を少しずつ入れ、しっかり蓋をしめます。

さてカップの中でどんなことが起こっているかな。ぶくぶくしてきた、シュワシュワしている、穴からなんか出てきたなど、参加者の声が聞こえてきます。僕のはまだ何にも出てこないよの声に、少し揺らしてみるといいよとの先生のアドバイス。ゆっくり揺らすと穴から白い泡が出てきてにっこり顔。ブクブクと出てきた穴は実際の火山でいうところの火口なのでした。

実験を終えたところで先生からまとめのお話です。今皆さんが実験してシュワシュワ、もこもこと出てきたものが溶岩です。実験では二酸化炭素の泡を発生させることで噴火に見立てましたが、実際の火山の噴火ではマグマの中に溶け込んでいる水が噴火の決め手になります。マグマが地表に向かって上昇していき、周囲からの圧力が弱まると含まれている水が水蒸気となり体積が一気に膨張してマグマが泡立ち噴火します。噴火する時に揮発性成分が多く含まれていると、爆発的な噴火になり、それほど多くないと溶岩を出す噴火になるのです。

帰りには、学芸員が採集した火山噴出物に触れる機会があり、小さな穴があいている溶岩や白くて丸い形の軽石などをみんなで代わる代わる触ったり持ち上げたりして、感触を楽しんでいました。

今回のよろずスタジオも多くの方の参加があり、どの回も大盛況のうちに終わりました。

（友の会 佐々木あや子）



お酢と糊を入れたらゆっくりゆっくりかき混ぜて



あ、何か出てきた！



こっちの石もってみよう



お話を聞く参加者



## 活動報告（植物グループ）

### ◆植物観察会「高尾 日影沢の春」

2026年3月24日（火）／高尾山 日影沢他／  
26名（スタッフ6名含む）／担当：植物グループ

人気のある高尾山のスマレの多い日影沢を訪ねた。  
JR 高尾駅を集合場所とし、来られた方には順次  
バスに乗り日影沢の入り口で待ってもらった。

幸いなことに天気もよくスタッフを含む26名、  
田中館長が学会に参加されたため、担当から簡単に  
高尾山の概要と植物相、スマレ類のことについて説  
明した。

午前中はキャンプ場の先のフタバアオイの生育す  
る場所まで行き、キャンプ場に戻って、昼食とした。  
残念ながらフタバアオイはまだ蕾の状態であった。

途中で見た植物は、キクザキイチゲ、アズマイチ  
ゲ、ニリンソウ、マルバコンロンソウ、ヨゴレネコ  
ノメ、クロモジ、アブラチャン、コチャルメルソウ  
等で、これらは開花していたが、スマレ類は数株の  
アオイスマレとナガバノスマレサイシンの花が見ら  
れる程度であった。エイザンスミレやタカオスマレ  
はまだ葉を展開し始めたところで、これからという  
感じであった。

日影沢の植物の個体数は随分と減ったと感じた。  
木々が成長して林下が暗くなったこと、訪問者が多  
く、踏み込みや踏みつけ、過剰な草刈り、土留めに  
植えられたシャガが地面を覆いスマレをはじめキク  
ザキイチゲやアズマイチゲなどが追い出されてしま  
っている。

日影 12 時 43 分発のバスで蛇滝口へ移動し、駒  
木野公園の手前で、キバナノアマナ、ヤマエンゴサ  
ク、アズマイチゲ、ハナネコノメ、ヒメニラなどを  
観察し、14 時 30 分に駒木野公園で解散、徒歩で各  
自高尾駅まで向かった。（植物グループ山田隆彦）



ハナネコノメ



ナガバノスマレサイシン



キバナノアマナ



観察会風景



アズマイチゲ



◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2026年4月25日（土）／博物館から吾性沢／16名（スタッフ含む）／担当：植物グループ

気がついてみると昨年に引き続き本年度も4月の身近な植物観察入門の担当となっていました。近頃はリピーターの方が多くなってきているようなので、本来なら昨年度とは違った観察場所で開催したいところ。一方で同じ時期に同じルートをたどることでいつも出会える植物に再会した時には“またお会いしましたね”と心の中でつぶやいたり、再開できなかった植物に対しては“どうしたのだろう”と心配したり、新たな植物を見つけたときは“おお、こんなところに”と感動したりと、それはそれでとても有意義だ。ということで今回は迷うことなく昨年同様、吾性沢方面に向かう。



ムラサキカタバミ

少し残念なことに目指したオオバウマノスズクサの花は終りに近く、艶やかな色彩が少し褪せ始めてしまっていたが、この時期はいろいろな花が見られるので全く困らない。スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、イモカタバミ、ムラサキカタバミのそれぞれの相違点、わかりやすいジュウモンジシダやコモチシダの紹介などなどで時間はあっというまに終了予定時間となる。

担当の一人が自宅庭で採取したシロバナタンポポを持参し、タンポポに関しての話をいただいた際、タンポポの“たね”は種子と呼ばず、果皮が密着しているので瘦果と呼ぶと説明したのだが、“身近な植物観察入門”なので“羊の皮を被った狼”（イソップ物語）をなぞらえ“果実の皮を被った種子”と言えばよかったのにと今になって後悔している。

（石井俊哉）



イモカタバミ



ヤブニンジン



ハンショウヅル

「大雄山の春の植物」中止

2026年4月27日の植物観察会「大雄山の春の植物」は、雨天のため中止としました。

（友の会 植物グループ）



## 活動報告（総会イベント）

◆総会講演会「酒井恒博士没後 40 年 博物館のお宝酒井コレクションとカニ博士酒井恒氏の研究生活」

2026 年 4 月 26 日（日）／博物館星槎ミュージアムシアター／80 名／講師：佐藤武宏氏（当館館長）・一寸木肇氏（前大井自然園園長）

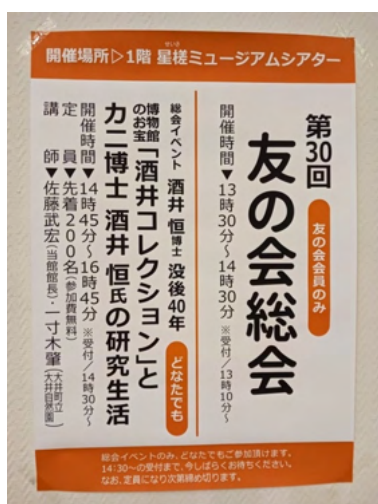
まずは佐藤館長の講演です。はじめに酒井コレクションとはどのようなもののかのレクチュアで、乾燥標本・液浸標本・細密画・文献・書簡などの 1 万 2 千点余りにわたる資料群との事。次に酒井恒氏の略歴、酒井コレクションが博物館へやってきた経緯と、当コレクションの価値と酒井博士の基本情報を話されました。

酒井コレクションが持つ意義は、甲殻類の分類学において他者の追従を許さぬところにあり、さらに標本・細密画・文献がこの博物館に一括で保存されている点にあるのだそうです。数多くの酒井コレクションのなかには特筆すべきものもあり、江戸時代後期、長崎オランダ商館の医師として赴任してきたシーボルト採集の標本や、昭和天皇と酒井博士の深い関係を象徴する標本があるとのことでした。

館長が若かりし頃、現在の上皇陛下がご来館されたとき、酒井コレクションのうち昭和天皇が深くかわられた標本を描いた細密画などについて進講したとき、「これは父（昭和天皇）とゆかりのあるものですか」と館長に語り、昭和天皇を懐かしんでいたお姿が印象に残っているとの事でした。

その後も酒井コレクションの寄贈は続き、2016 年に博士のご子息から文献類の寄贈を受け、また 2020 年には筑波大学下田臨海実験所で眠っていた標本が発見され、寄贈されました。

コレクション中に極彩色の細密画がありますが、このなかのいくつかは東京芸術大学日本画科卒業で、最初の夫人であった茂子さんの手によるものだそう



です。茂子さんは 1941 年、岐阜にて 31 歳で亡くなっています。酒井博士が出張中のことでした。亡くなられた理由について生前に酒井博士は多くを語らず、様相は判然としていませんでした。

館長は 2020 年 2 月と 2024 年 9 月、コロナ禍をはさんで岐阜県立図書館に調査に出かけます。そこで岐阜日日新聞 3 月 18 日夕刊に夫人と長男、二男、長女が昼食時、長女を除いた 3 人が猛烈な下痢嘔吐をし、同夜夫人と二男は死亡との記事を発見。3 月 18 日朝刊では死因はフグの毒によるもので、魚屋がフグの卵をタラコとして販売したためであることの記事も見つけ、他にも中毒者が続出したため警察が捜査に及んだという事件があったことを突き止めました。佐藤館長の調査により茂子夫人の死因がはっきりしたことは、酒井博士の研究史の上で大切な成果です。

最後に館長は、酒井コレクションの常設展示はジャンボブック展示にあるのでぜひ見ていただきたい。酒井コレクションについては博物館の貴重な資料であり県民共有の財産でもあるので、今後も公開・利用を進め、将来に引き継ぐ努力をしていきたいと締めくくられました。

休憩をはさんで一寸木氏の講演です。一寸木氏は酒井恒博士の晩年のお弟子さんで、博士の研究人生にまつわるお話をされました。

まず博士の生い立ちから学生時代です。1903 年足柄上郡金田村（現大井町）に生まれます。小学校卒業後旧制小田原中学へ、徒歩部（現在の陸上競技部）では健脚を鳴らし県中学駅伝大会で優勝、この時のメダルが最近酒井邸から見つかり小田原高校に寄贈されました。その後神奈川師範に進み、大井町に帰省中メダカの観察をしている時に関東大震災に遭い、その様子をカメラで撮影しています。師範時代には早くも『理科文庫 エビとカニの生活』を出版しています。

1932 年東京文理科大学動物学科を卒業、同大学附属下田実験所に赴任、翌年茂子さんと結婚、1935 年には多色刷りの『日本蟹類図説』を刊行しています。1938 年に岐阜県女子師範学校に奉職、1939 年には「日本産蟹類の研究」で京都帝国大学理学博士取得、こののち茂子夫人を亡くされています。1941 年、博士は親戚の仲立ちで日本画を学んでいた綾子夫人と再婚しました。1943 年に神奈川師範学校教授、戦後の 1949 年横浜国立大学学芸学部教授となり、1954 年足柄下郡岩村（現真鶴町）に横浜国立大学附属理科教育実験所の開設に尽力し初代所長となります。開設には当時の山本真一岩村村長と遠藤晴雄教育長（のち遠藤貝類博物館館長）の大きな援助がありま

した。この実験所は現在でも、海洋生物・海洋環境に観察・実験・研究を通して理科教育の育成に大いに貢献しています。

1961年には日本甲殻類学会を小田原利光医師らと共に設立しました。小田原氏の患者に洪沢敬三(祖父は洪沢栄一)がおり、この洪沢氏の支援もありました。これ以前の1952年、昭和天皇に「相模湾産カニ類の特殊性」の御進講が縁となり、相模湾の海洋生物研究の相談役となりました。博士逝去の折、昭和天皇は御製の中で、「船にのりて 相模の海に ともにいでし 君去りゆきぬ ゆふべはさびし」と博士への想いを詠われています。

博士は研究論文のほかに一般書や児童書も執筆されています。これらは古さを感じさせず再版が重ねられました。博士の普及書への執筆姿勢は『神奈川県史』各論編4 自然の執筆でも発揮されました。県史は一般の方々が読者であることを念頭にしなければならぬとし、ほかの執筆者が論文調で難解かつ複雑な文体であった中に、わかりやすく書くことを心がけていられたそうです。

退官後はシーボルト研究にもフィールドを広げられ『シーボルトと日本動物誌 ー日本動物史の黎明ー』を書かれました。故郷の大井町の小中学校に自著を寄贈されました。現在は大井町生涯学習課蔵書となっているそうです。

1986年、博士は82歳で亡くなりました。墓所は鎌倉市二階堂にある覚園寺です。博士、フグ中毒で亡くなった茂子夫人と二男、綾子夫人が眠っています。

一寸木氏は博士のお宅にうかがった時、模写に失敗した原画をねだったところ叱られたそうです。ところが帰りぎわに模写用のケント紙を分けてくださったそうで、自分なりにしっかり取り組むようにと教えられたとのこと。今でも一寸木氏は酒井博士からの自筆の年賀状を大切にしているそうです。

佐藤武宏館長、一寸木肇氏の講演、自然史の資料の在り方とその価値、自然史研究者の軌跡の記録について伺ったのですが、5月10日(日)まで開催されていた企画展「自然史アーカイブズを開く」の内容とも近接していて関係性が高い内容と感じました。この企画展とコラボできるような手立てをあらかじめとることができていたら、博物館からの情報発信として一体的に扱えたのにな、と思うところでした。(友の会 関口)



総会が終了し、講演会を待つ皆さん



佐藤館長の講演



一寸木氏の講演



講演後質疑に答える両氏



## 情報クリップ

友の会会数：280名（5月15日時点）  
正会員：277名／賛助会員：3名

### ●博物館人事異動

2026年4月1日付

#### <館長>

昇進：佐藤 武宏（前・学芸部長）

#### <副館長>

転入：田代 和也

#### <学芸部>

昇進：山下 浩之（学芸部長／  
前・企画普及課長）

異動：折原 貴道（菌類担当／  
前・企画普及課兼務）

#### <管理課>

転入：齋藤 英夫（管理課長）  
金村 和美  
渡邊 凌雅

新規採用：譲原 久佳

転出：佐伯 有紀（前・管理課長）  
小林 優宏  
相馬 夏実  
齋木 杏里紗

#### <企画情報部 企画普及課>

異動：石浜 佐栄子（企画普及課長／  
学芸部兼務）  
田中 徳久（学芸部兼務 植物担当）

### ●退職

2026年1月31日付

池嶋 美代子（管理課）

2026年3月31日付

大河原 邦治（前・副館長）  
高橋 律子（管理課）

### ●2026年度 友の会担当職員のご紹介

石浜 佐栄子、苅部 治紀、夏目 樹、本杉 弥生

## 行事案内

### ◆シンポジウム「里山の動物と私たち」

#### ～共に生きるために私たちができること～

博物館特別展「しらべて分かった！里山にくらす動物たち」に合わせ、シンポジウムを開催します。基調講演とパネルディスカッションで多方面から小田原を取り巻く里山の現状を知り、生物多様性保全と管理について私たちができることを考えるきっかけになるよう願って、企画しました。多くの方の参加をお待ちします。

◎第一部 基調講演『里山に暮らす野生動物と人間の関わり、今と昔』：石川智弘氏（かながわ鳥獣被害対策支援センター）

◎第二部 パネルディスカッション『里山の今、私たちの役割』

#### パネラー：

川島範子氏（NPO 法人おだわらいノシカネット）  
有田一貴氏（小田急電鉄(株)デジタル事業創造部）  
宮本 亮氏（Recovery and Reload）  
石川智弘氏（かながわ鳥獣被害対策支援センター）  
菅田悠介氏 NPO 法人 MOTTAI（司会）

実施日：7月26日（日）13：00～16：00

場 所：博物館星槎ミュージアムシアター

対 象：オープン（どなたでも） 大人 200 名

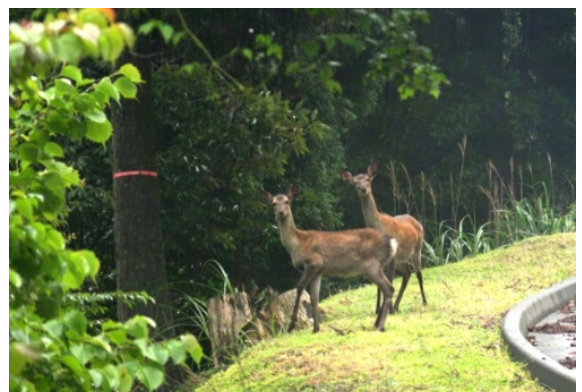
参加費：無料

申込み：友の会 WEB フォームで、7月20日（月）までにお申し込みください。

葉書による申し込みも受け付け（博物館友の会宛てで出してください）ますが、返信は電話でいたします。当日受付も可（20名）（記載内容はP16を参照）

連絡先：k.a.odawara@gmail.com

電話：080-1088-9269（赤堀）



## ◆生物間共生講演会 第15回

### 「植物の命をつなぐ菌根共生：植生遷移・共進化・希少植物保全を支える見えない力」

日 時：9月6日（日）10:30～14:30（～茶話会 30分）

場 所：博物館西側講義室

講演者：奈良一秀氏（東京大学自然環境学専攻教授）

募 集：60人

申 込：友の会 WEB フォーム

締切り：8月22日（土）

参加費：1,200円／人（会員外 1,500円）

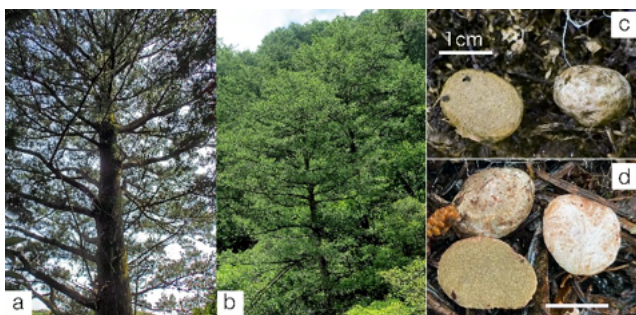
連絡先：c.akahori@gmail.com

080-1088-9269（菌事勉強会：赤堀）

内容紹介：

樹木の細根にキノコ類が共生する「外生菌根」は森林の成立と維持を支える、地球上で最大規模かつ重要な生物間共生である。樹木は大量の光合成産物を菌に与える一方、成長に必要な窒素やリンの大部分は菌からの供給に頼るほど相互依存を高めておりどちらも単独では生きていけない。

既に成立した森林では、多種多様なキノコの感染源（菌糸や孢子）が土壤中に普遍的に存在するため菌根菌欠如が問題になることは少ない。一方、噴火跡地のような菌根菌の感染源が乏しい環境では、樹木の定着は極めて困難となる。富士山火山荒原ではまばらに定着した先駆樹木のミヤマナギ周囲にのみ菌根菌の菌糸ネットワークが形成され、それが樹木定着や植生遷移の起点となっている。



絶滅危惧樹木を支える菌根菌

(a:ヤクタネゴヨウ、b:トガサワラ、c:ヤクタネショウロ、d:トガサワラショウロ)

成熟林になると、無数の菌根菌ネットワークが形成され、森林の維持に重要な役割を果たしている。さらに、林床植物の中には、特定の菌種のネットワークに依存しないと生きていけないものもある。

また、森林土壌中には休眠状態で長く生き残るキノコの孢子が存在し、菌根や菌糸が消失するような大規模攪乱後には、樹木の更新を支える感染源となる。絶滅危惧樹木トガサワラと三千万年以上にわたって共進化した新種トガサワラショウロの埋土孢子も、その一例である。

このように、土の中の見えないキノコの菌糸や孢子は時空を超えて植物の命をつないでおり、本講演ではその巧妙な仕組みを紹介する。（奈良）

## ◆ 地話懇話会「愛鷹山の地質」

話題提供者：山口恭介氏（当館外来研究員）

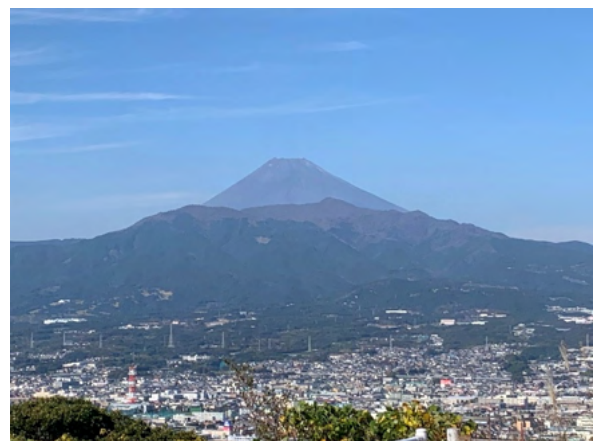
日 時：8月26日(水) 14:00～15:30

場 所：博物館一階西側講義室

対 象：友の会会員を原則とする

申込み：当日受付制（人数制限は設けません）

備 考：マスクの着用については、個人の判断にてお願いいたします。



香貫山から見た愛鷹山と富士山



見事な貫入岩



内容紹介：

愛鷹山は富士山の南東、箱根山の西方に位置し、最高標高1,540mの山です。この火山の活動時期は40万年前～10万年前と言われており、かなり侵食が進んだ山となっています。

この山の活動時期は、富士火山に先行する小御岳火山や先小御岳火山、また箱根火山の活動時期に重なっていると言われています。今回は愛鷹山の魅力と、愛鷹山で見られる特徴的な露頭の紹介をします。

### ◆よろずスタジオ「葉っぱであそぼう」

これは何の葉っぱかな？葉っぱクイズをして名前が分かったら葉っぱスタンプを楽しもう！

対 象：子ども（当日の来館者）

申込み：不要／オープン

参加費：無料

場 所：博物館1階講義室（東側）

日 時：9月13日（日） 13:00～15:00



葉っぱ図鑑の完成！

### ◆植物観察会 『身近な植物観察入門』

植物グループのスタッフと気楽に植物観察をする初心者対象の観察会で、今回は吾妻山周辺です。初めての方、会員外の方大歓迎です。

#### ★9月の『身近な植物観察入門』

日 時：9月26日（土）

集 合：JR二宮駅改札口付近 10時

解 散：同所 12時頃

観察地：吾妻山周辺

参加費：50円（保険料）

講 師：友の会植物グループ

対 象：オープン・どなたでも（小学3年生以下は保護者同伴をお願いします）

持ち物：飲み物・雨具・あればルーペ、虫メガネ等

申込み：友の会 WEB フォームで9月23日（水）まで（担当からの返信メールはいたしません）

\*メールを使われない方は担当者へ電話で  
9月21日（月）～23日（水）の  
18時～21時に申し込んでください。

担 当：松井 090-7411-5024

雨天等で中止の場合は申込者に担当から電話連絡いたします

問合せ：担当へ（18時～21時）

（博物館には問合せないで下さい）

### ◆植物観察会

#### 「三浦半島のハマアザミを訪ねて」

2024年に真鶴で40年ぶりの再発見と伝えられた絶滅危惧種のハマアザミが、横須賀市でも再確認されました。海岸に適応したハマアザミを見に行きませんか？

そして、海から関根川の溪流へと、タニジャコウソウなども観察しましょう。

実施日：10月6日（火） 雨天中止

場 所：横須賀市秋谷

集 合：JR横須賀線逗子駅東口 改札口前10時

「佐島マリーナ」行きバスに乗車

解 散：同駅 15:00頃

コース：久留和海岸～関根川遊歩道

講 師：田中徳久学芸員

対 象：オープン（どなたでも） 大人20名

参加費：会員500円 非会員700円

申込み：友の会のWEBフォームで9月29日（火）までにお申し込みください。

メールアドレスの無い方は9月27日（日）～9月29日（火）の19:00～21:00の間に電話で申し込んでください。

電話申込先：佐竹 090-2329-1324

当日連絡先：佐竹 同上

石橋 090-2159-4752

\*詳細はメール等でお知らせします。



ハマアザミ

## ◆ 第147回サロン・ド・小田原 「里山の動物」

話題提供：鈴木 聡 氏（当館学芸員）

講演日時：10月10日（土）14:00~15:30

受付は13:40から

場 所：生命の星・地球博物館 西側講義室

定 員：45名 先着順 事前申込みはしない。  
オープンで一般も可。

参加費：無料

内容紹介：

特別展「しらべて分かった！里山に暮らす動物たち」（下記参照）に関連して、神奈川県の里山における自動撮影調査で集めた画像などを紹介しながら、身近な自然に暮らす野生動物の生息状況や生態について解説します。



夜間撮影で捉えたタヌキの画像

### 《ご案内》

●特別展「しらべて分かった！里山に暮らす動物たち」

開催期間：2026年7月18日（土）～11月8日（日）

哺乳類、鳥類などの里山の生きものの魅力やくらしぶりの変化などを分かりやすく解説します。多様な生きものについて大人も子どもも楽しく学べる展示を通じ、この先の未来、人と野生生物がどのような関係を築いていくべきか、改めて考えるきっかけを提供します。



### 友の会主催行事の参加申込みについて

- ◆行事案内に申込み方法が指定されていない場合、往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局までお送りください。
- ◆必要事項：行事名／開催日／参加者全員の氏名・年齢（学年）／会員番号／代表者の住所・電話番号／指定事項
- ◆行事案内に申込み方法が指定されている場合は指定された方法（メール・電話等）にてお申し込みください。
- ◆現在、一部の講座でWEBフォームによる申込受付を行っています。以下のQRコード又はURLよりアクセスして、申込をしてください。  
なお、申込後すぐに「フォームの回答のコピー」が送られて来ない場合は受付がされていないので、再度申込みをお願いします。それでも「フォームの回答のコピー」が来ない場合は、問合せ先等にご連絡ください。

[https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDqewuG\\_xlkfHWxkOxP2QdbO46QsdOfZfGyCIP3m8icnKvQg/viewform?usp=publish-editor](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDqewuG_xlkfHWxkOxP2QdbO46QsdOfZfGyCIP3m8icnKvQg/viewform?usp=publish-editor)



### 注意！

- 参加費は友の会会員1名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記事項に記載があります。
- オープンの行事は会員以外の方も参加できます（参加費が会員とは異なる場合があります）。
- 小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。
- チラシの発行されない行事もありますので、直接＜連絡先等＞へお問い合わせください。
- 持ち物など詳細はメール・返信はがきに記載されます。

次号は、2026年9月15日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会  
Vol.30、No.1、通巻132号 2026.6.15 発行  
編集：友の会広報部  
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499  
TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846  
E-mail：kpmtomo@ybb.ne.jp  
Blog：http://blog.livedoor.jp/kpmtomo  
X：@kpmtomo